

## Journal of Occupational Science (2017) 24巻 1号

Journal of Occupational Science 24 巻 1 号は、2016 年に Auckland で開催された第 7 回 ASOS (Australian Society for Study of Occupation) のゲストスピーカー 8 人の論文を掲載している。このカンファレンスは「インクルージョンと社会参加」をテーマにしていた。8 論文は、New Zealand と Australia における人々のインクルージョンと社会参加を多層的に論じている。以下の書評は、本号の記載順通りではないことをお断りしておく。

最初に扱うのは、Margaret Jones, Clare Hocking, & Kathryne McPherson (2017)「参加を可能にするスキルのあるコミュニティ：外傷性脳損傷児と共有作業」である。これまでリハビリテーション文献において参加が論じられる時、個人や個人と家族は環境と分けて論じられ、人々と文脈の間で起こり変化する行動は注意されなかった。本研究では、Dewey のトランスアクションナルパースペクティブを基盤にし、9～12 歳の外傷性脳損傷児の 6 つのケーススタディーにおける参加を探索した。行動の複雑性と変化を理解するために、情報を子ども、家族、コミュニティのメンバーのインタビュー、写真、観察、書類資料から収集した。研究の結果、子どもたちが他の人々と共にする共有作業 (Shared Occupation) が参加の中心にあること、参加を可能にする 4 つのスキル (Participation-enabling skills) として Driving, Leading, Including, Performing が明らかにされた。さらに、これらのスキルを人々は共有作業を通して学んでいることも示唆された。最後に、これらのスキルと作業科学と作業療法の文献に見られるテーマについての考察では、セラピストが信じてきた問題解決型のアプローチが参加をすすめるのか、実際に共有する作業の文脈に関わって、スキルが高まって参加ができるようになるのか疑問が提示された。

作業的公正の社会、やさしい社会や参加しやすい社会における作業を考えると、本論文は示唆に富む。寛容、尊重、承認の社会をつくるためには、共有作業に参加する機会を通して、人々の中にこれらのスキルを育てる重要性に気づかされる。この分野の研究が期待される。

次は、Helen P. Hamer, Jacquie Kidd, Shona Clarke, Rachael Butler & Debra Lampshire (2017)「中絶されない市民：精神保健サービスユーザーのインクルージョンの実践」である。本研究は、Isin の市民権理論 (市民としての承

認、インクルージョン、平等、仕事や福祉の権利の資格をめぐる闘いを扱った) を使って、精神病の診断を受け、サービスを受けている人々の経験を分析した。以前に行われた 2 つのリサーチ (Hamer, 2012; Hamer, Clarke, et al., 2014) のデータを利用している。精神保健のサービスユーザー 82 名に半構造的質問法で収集したデータをテーマ分析し、批判的構成主義アプローチで、彼らが経験した (権利を与える/疎外する) パワー構造を明らかにしようとした。

本論文は精神保健サービスユーザーが市民権を阻害され仕事や他の作業から辺縁化され、参加が阻害された経験を明らかにするとともに、サービスユーザーと支援者が作業を通してインクルージョンを促していることも明らかにしている。

評者にとっては、本論文のタイトルの一部となっている、インクルージョンの実践 (実際の作業を通して、辺縁化され、孤立した状態からインクルージョンを進める。) が興味深かった。サービスユーザーが公園作業に雇われ、働き、一緒に働いた普通の市民の意識が変化してインクルージョンに至ったというナラティブに示されている。

Clare Hocking (2017)「社会的公正としての作業的公正：インクルージョンの道徳的要求」は、作業的公正に関する 7 論文 (正確には 5 論文と 2 章) のシステムティックレビューである。Hoching (2017) は、社会的公正とは、社会的状況に平等、寛容、参加をつくること、より安全、平和、均等な社会を維持することであり (Friesenn, 2007)、作業的公正も作業的選択、well-being、よりインクルーシブな社会につながる参加と平等を強調するが、社会的公正 (哲学) は議論の重要性と正当性を強調し、作業的公正 (概念) は参加とインクルージョンのインパクトを明白にすることに力点を置くという立場から 7 論文の分析を進めた。

7 論文を、「何に論点をおいているか、社会的公正か作業的公正か?」「人権と作業権に特化した引用文献であるか?」「道徳的主張と倫理的主張は行われているか?」「社会的公正や作業的公正に関する研究者の位置づけ」の研究疑問に基づいて分析した。

考察で、Hoching (2017) は、すべての論文の著者が社会的公正の概念を訴え、人権侵害について述べ、作業剥奪と作業権の違反を論じたこと、これらの論文は最

近の論調と同様に、作業的公正のためには、人々が与えられるものより、格差や人々ができる、する能力、する機会の重要性を強調していると述べた。Hocking (2017) は、作業的不公正を経験する人々が役立つ市民であり苦悩する市民であることに、作業的公正の道徳的問題があることを示唆することによって、作業的公正を論じる必要性和その強みを提示している。

緻密な 7 論文の考察が述べられたが、評者が特に興味深かったのは、社会参加から作業参加へ視点を移すことによって、日常生活の障壁と人間の苦悩を認識できるとの主張である。きちんと作業参加に視点を置いた研究が望まれる。

次は、Valerie A. Wright-St Clair & Shoba Nayar(2017)「文化的解放としての高齢アジア系移民の参加」である。近年世界的に高齢者の移住が増加傾向にある。高齢者の移住は祖国で慣れ親しんだ作業を移住先で続けられないために、移住先のニュージーランドでの社会参加がむずかしいと考えられてきたが、近年高齢での移住が社会関係資本 (social capital) に貢献しているという調査報告が出てきた。しかし、その過程は明らかでなかった。本研究では、アジア系の高齢移住者が市民社会に貢献する過程をグラウンデッドセオリーを使って探った。データ収集はニュージーランドに移住した 74 名のアジア系 (中国系、韓国系、インド系) 高齢者 (60-83 歳) にフォーカスグループインタビューを実施し、そのうち、15 人に個別インタビューを行った。結果、市民社会の貢献までの過程には、高齢の移住者が自分の民族のコミュニティに参加する段階があることがわかった。

考察は、高齢移住者が、移住先の社会に直接参加することにより、自分と同じ民族のグループに参加し、そのコミュニティとの一体感を高め、安心感をもつことを明らかにし、そこを足場に、そのコミュニティを超えた、大きな社会に参加する経過を概念化した。自分の民族グループへの参加を通して、もっと大きな社会の市民としてインクルードされ、新しい市民としての義務を果たすことに喜びを覚え、その経過が、社会に参加する工夫になっていることを、概念化した。本論文は、参加する社会についてその複雑さ、作業との関連について示唆に富む論文である。

Marilyn Waring (2017)「切れ目なく続く相乗作用:フェミニスト経済学者と作業科学者が人権と出会う」では、フェミニスト経済学者が、専門的視点と自身の高齢の親を介した経験を背景に、人権のレンズを通して作業を研究する重要性を主張する。国際的労働法規や経済活動が作業をどのように扱っているか?を問い、経済政策の作

成に影響しないのはどんな仕事なのか?を論じ、家事を例に、無報酬がその作業の社会的価値に与える影響を示す。

Gail Whiteford (2017)「社会的インクルージョンとしての高等教育への参加:作業的観点から」は、社会参加をエンパワーするために、高等教育参加を研究するように鼓吹している。その論旨は以下のように明白であり、示唆に富む。

国際的認識では、社会参加とは学び (教育に参加すること)、働くこと、(人々や社会と) 関わり、社会に発言するために必要な資源、機会、能力があることを意味する。学び (教育参加) は社会参加の一面であり、権利である。

一方、作業科学では、社会文化的側面、作業的アイデンティティー、選択、社会参加への aspiration (野心) の発達が研究され、そのダイナミックな関係が明らかになってきた。Whiteford (2017) によると、社会文化的に恵まれない状況にある若者は新しい作業的アイデンティティーとの出会いに恵まれないので、高等教育参加は人々の社会参加の強力な手段となる。今後、作業科学は、高等教育に参加すること、大学生であることを、移行的作業 (transitional occupation)、変化してゆく作業 (transformative occupation) として研究する必要がある。そうすることで、社会的インクルージョンをエンパワーするであろう。

社会のインクルーシブな変化を促すために、高等教育参加という作業をとらえ直す必要を示唆している。

この後の2論文は、先住民の視点からの論文である。Hinematau Naomi McNeill (2017)「作業的公正の視点からのマオリと自然環境」である。ニュージーランドの Tapuika 族の世界創生物語と日常の実践からインクルージョンと参加を探った論文である。McNeill (2017) は、日常生活における Tapuika の人たちの自然環境との積極的ななかかわりが持つインクルージョンと社会参加の力を見出した。植民地時代には、先祖の土地から引き離されたことにより、自然環境への積極的ななかかわりという作業から疎外されたが、近年の入植協定によりこのインクルージョンの作業に関わることが可能になり、土地の守護を通して、インクルージョンが実行されることを示した。

評者にとっては、インクルージョンを考えるとき、人々が作業を通して何とつながり、どんな意味を見出すのかを考えるヒントになる示唆に富む論文であった。

Valance Smith (2016)「Haka の先住民のスピリチュアリティは毎日の実践を活性化する」は、本号の編集者 Clair Hocking と Valerie Wright-St Clair によると、著者

Smith が 2016 年の ASOS (Australian Society for Study of Occupation) で表彰された。この受賞は Wilcock 以来二人目の栄誉である。ちなみに、Haka とは先住民マオリが受け継いできた歌やかけ声のパフォーマンスアートであり、著者はそのパフォーマーである。

Smith(2016) は、作業科学に多様な考えを導入するため、マオリの視点から作業科学はどのようにみえるかを探り、マオリのスピリチャリティーがどのように人々の日常の実践を鼓吹できるのかを探索した。Smith(2016) が手掛かりとしたマオリの文化、歴史を通して伝えられてきた世界観では、Haka を通して表現されるマオリのスピリチャリティーが人々を触発し、活性化し、調整し、その日常的活動は、彼らの文化と歴史に深く根差した kaupapa (ゴール, 目的), marama (気づき, 理解), pono (真実, 誠実), tika (正しい行動), aroha (愛, 情熱), mana (力, 賢さ) を基盤としている。別な言い方をすれば、人がゴールに気づき、誠実なら、自分の本当の気持ちに応えながら、身体を使った正しい行動でこの気づきを強化することが可能となり、それがゴールを実現する戦略となると述べている。

Smith (2017) は、このマオリの原則に、作業科学の目的的活動のパターンを見ると述べている。この目的的活動が行動を起こし、目的である well-being に導くと述べている。

評者はこの論文を読み進むのにかなり苦勞した。マオリの言葉が多く使われ、その世界観を理解できたかは、自信がない。マオリの人々が haka を通じてこれまで伝えてきた真実、正しい行動、well-being についての信念を、haka を唱えることによって、自分を鼓吹し、日常生活であるべき行動を起こし、よい状態 well-being に進んでいく、haka は同時にその戦略になるということだと理解した。

ある文化を基盤に共有する信念に基づく目的に触発され行動を起こすこと、それが健康感に影響することは理解できるが、健康・健康感を目的と言えるかは評者には腑に落ちなかった。

小田原悦子

## 文献 (引用順)

- Jones, M., Hocking, C., & McPherson K. (2017). Communities with participation-enabling skills: A study of children with traumatic brain injury and their shared occupations. *Journal of Occupational Science*, 24, 88-104.
- Hamer, H. P., Kidd, J., Clarke, S., Butler, R. & Lampshire, D. (2017). Citizens un-interrupted: Practices of inclusion by mental health service users. *Journal of Occupational Science*, 24, 76-87.
- Hocking, C. (2017). Occupational justice as social justice. *Journal of Occupational Science*, 24, 29-42.
- Wright-St Clair, V. A., & Nayar, S. (2017). Older Asian immigrants' participants as cultural enfranchisement. *Journal of Occupational Science*, 24, 64-75.
- Waring, M. (2017). Segues and synergies: Feminist economist and occupational scientists meet human rights. *Journal of Occupational Science*, 24, 43-53.
- Whiteford, G. (2017). Participation in higher education as social inclusion: An occupational perspective. *Journal of Occupational Science*, 24, 54-63.
- McNeill, H. N. (2017). Māori and the natural environment from an occupational justice perspective. *Journal of Occupational Science*, 24, 19-28.
- Smith, V. (2017). Energizing everyday practices through the indigenous spirituality of haka. *Journal of Occupational Science*, 24, 9-18.

## 翻訳協力者

- 西野由希子 (湘南医療大学)  
西方浩一 (文京学院大学)  
馬場博規 (磐田市立総合病院)  
吉川ひろみ (県立広島大学)  
西野歩 (煌めく返り花プロジェクト)  
村上典子 (リハビリステーションうるまの虹)  
鴨藤祐輔 (訪問看護ステーション不動平)